

9月の行事報告 September



壮年会の法座に参加して

私は、日常、有限な世界で、いわゆる世俗において自己の立場を確立し、利害得失を考え利益の増進のため励んでいます。それに対し、中原寺さんおよび壮年会は、無限な世界、聖なる空間を考えることが出来る唯一の場所です。

9月7日(土) 午後3時～

私は、若者に経済学や経営学の教育を提供しています。その学問が経済効率や利益獲得のみだとしたら、若者を惑わします。若者が私を媒体として1ミリでも無限の世界を垣間見られるようになるために私は、中原寺さんおよび壮年会で聴聞し、皆さまのお話を聞かせていただいています。

(山根 幹雄 記)

宗真寺仏教壮年会 創立20周年記念大会に参加して

宗真寺仏教壮年会 創立20周年記念大会 9月28日(土) 午後2時～

9月28日(土)、館山市の宗真寺仏教壮年会創立20周年記念大会に参加して参りましたのでご報告します。

宗真寺の前身は元和元年(1615年)の頃、門雪という僧が南條村に建てた「一向堂」という草庵に始まります。その場所の地名は現在も字名「一向堂」として残っています。

記念大会は讃仏偈から主催者の挨拶に続いて、浄土真宗本願寺派総長で光明寺(君津市)住職の石上智康師の記念講演会でした。講題は「生きて死ぬ力」でした。その中で「私の思いで心臓を動かし、私が計算をして呼吸をしていた



ら、夜ねむるひまもない。みなおのずから、そうさせるはたらき、生きていくそのまが、生かされている私」という言葉が印象的でした。講演に続いて、宗真寺コーラスグループの歌声が素敵で心を動かされました。その余韻にひたりながら、当日最後の懇親会で盛り上がり一日の記念行事が終了しました。

(石井 保 記)

10月の行事報告 October

文化講演会に出席して(ヤマザキ厚生年金会館 3F) 10月19日(土) 13時30分～

第31回中原寺文化講演会が10月19日に開催されました。講師は女優のサヘル・ローズさん、講題は「出会いこそ 生きる力」です。私は女優さんの講演が中原寺文化講演会に相応しい内容なのか疑問に感じながら、出席いたしました。私はイラン出身の日本の大学生とご縁があり、イランにはかねてより興味を持っていました。



初めは疑心暗鬼でしたが、講演が始まるとお話の明晰さに引き込まれていきました。イラン・イラク戦争での犠牲者は推定50万人と言われていました。サヘルさんご両親や家族もその犠牲になり、彼女は孤児院に預けられました。折から来院した人びとの内、厳しい審査を受けて彼女の養母となった方との出会いこそが人生を変えた始まりでした。

8歳で養母とともに来日してからは、苦難の生活が続き2人よく耐えて生きて来られた、と私も感無量です。それも親切な

訃報のご案内

麻木 隆一様/令和元年8月11日に往生されました。謹んで哀悼の意を表します。

訃報のご案内

杉田 善久様/令和元年9月27日に往生されました。長年「壮年会だより」にご尽力いただきました。

編集後記(壮年会だより)：令和元年12月「秋冬号」会報

今年も「喪中につき年賀欠礼」をいただく季節になりました。仏教徒、なかでも浄土真宗門徒には「喪中」はないと思いますが、皆さんはどうお考えですか。来年もご協力の程、よろしく願います。

壮年会だより

令和元年12月「秋冬号」 中原寺仏教壮年会だより Vol. 28



先日久しぶりに映画「あの日のオルガン」を観ました。先の大戦末期、保育園の園児のいのちを守る為に、園児達を熊谷市郊外の荒寺に疎開させた保育士たちの奮闘物語でした。涙なしではいられない感動のひとときでしたが、同時に戦争の残酷さと愚かさを痛感しました。ローマのフランシスコ教皇が来日され、長崎、広島を訪れ、「すべての命を守るため」核兵器の廃絶を訴えました。山崎龍明師は「憲法9条は私の願い」と示されました。我々仏教徒はお釈迦様の教えに従い、絶対平和を希求すべきだとの思いを強くしています。

【住・職・閑・話】



今年は9月以降に台風が立て続けに関東地方を直撃し、広範囲にわたり甚大な被害を各地にもたらしました。復興への道のりは長く厳しいものになると思います。被害の少なかつた私に何が出来るのかを考え、微力ながらその復興へのお手伝いをしていきたいと思っています。

以前、茨城県で水害によってご自宅が床上浸水したお宅にボランティアスタッフとして伺った時の話です。一階にあった家財道具や畳はすべて水浸しとなり、どこから手を付けていいのかもわからないなかで、住民の方が「まずはお仏壇を庭に出してもらえませんか」とおっしゃいました。たまたまそのお仏壇のご本尊が阿弥陀さまだったこともあって、何はなくとも、まず始めにお仏壇を濡れない場所に移して、粗末にはしてはならないとの思いに心を打たれました。

浄土真宗のお寺の本堂やご門徒さん宅のお仏壇のご本尊には阿弥陀さまがご安置されています。絵像の場合でも木像の場合でも、立ち姿であり、そのお姿は今にも目の前の私に向かって歩き出されるように思われます。阿弥陀さまの本来の

中原寺仏教壮年会の会長となって

来年は第32回オリンピックの東京開催があります。昭和39年東京で第18回オリンピックが開催された時の興奮は今でも鮮明に記憶しております。当時は経済の高度成長時代でもあり、東京タワーが建設され、新幹線が走り、東京都心には首都高速道路が開通する等、私たちには夢を見ているような時代でもありました。当時のオリンピック開催を境に私たちの生活環境は一変したように思います。この度の東京オリンピックは経済の変革ではなく、生活の環境整備や日本の精神的な文化の向上を世界に発信する機会であると思います。私たち日本国民は高度な文化人として世界に寄与して行く、ある意味での責任を負う立場に立たされているようにも感じます。

話は変わります。私は今年の中原寺仏教壮年会総会において石井前会長に代り会長職を拝命致しました。石井前会長は長年に渡り壮年会を牽引された事は誠に頭が下がる思いで、会員の皆様も同様に深く感謝されていることと存じます。

私は初めて会長職という重責を担い、どのように会を運営するのか戸惑いを感じながらの一年でした。基本的には石井

お姿について、親鸞聖人は、「色もなし、形もましまさず、然れば心もおよばず語もたえたり」と著わされ、私たちの思慮分別をはるかに超えた大きな存在「はたらき」であり、あえて喩えれば、光のようなものであるとお示くださいました。それではなぜ、本来かたちにあらわすことができない阿弥陀さまのお姿をご本尊としてお参りするの。もし、厳密に「阿弥陀さまは本来色もなく、形もましまさず、光のように私を包んでくださるのだから、どちらに向かって礼拝してもよい、いつでもどこでもお念仏しましょう」となれば、始めは阿弥陀さまに心が向くときがあっても、いずれ自分の心持の良い時や人生の困難に直面した時にだけ手を合わせることになるのではないのでしょうか。

常に世間のことに心揺り動かされ、仏さまに心が向かない私のために絵像、木像として手を合わせやすいお姿になられたのです。 私たちが、日々ご本尊に礼拝するのは、ご本尊のお姿を通して阿弥陀さまのお徳を改めて我が心にお聞かせいただき、そのお働きに報恩感謝の思いを示すためです。その立ち姿を通して、今すでに私たち一人ひとりに阿弥陀さまのお救いが至り届いていることを味わわせていただきます。

前会長の活動経緯を踏襲し、お寺との調整を図りながら、会員の皆様の現状に即した会の運営改革を模索して参りました。



中原寺仏教壮年会は他寺と同様に会員の高齢化が進む一方、若手の会員は増えず世代の交代が円滑に行われておりません。そこでこのような現状を踏まえ、今までのような活動・運営を今一度見直し、まずは壮年会をより現実的な組織に作り直すよう、皆様の知恵やご意見を拝聴しながら次年度の運営に臨みたいと存じます。

中原寺仏教壮年会の規約を読みますと、会の目的は第二条に「浄土真宗のみ教えを仰ぎ自信の報恩行に徹し中原寺教化活動推進核体となる」と表記されております。

会員の親睦も大切な活動ではありますが、会員一同が積極的にみ教えを学び、一人ひとりが浄土真宗の教化活動の核とならなければ壮年会の意味はありません。

何卒、次年度もご協力賜りたく宜しく願ひ申し上げます。合掌 (中原寺仏教壮年会会長 山奥 努)